三十九人）、世帯数は六百九十戸でした。

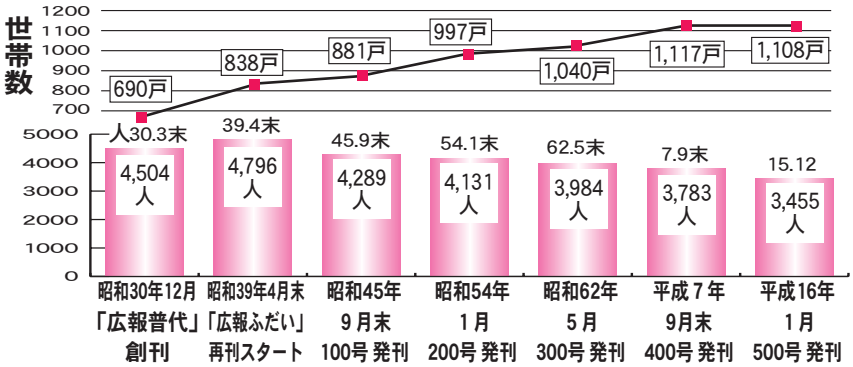
六年余りの休刊を経て再スタートした三十九年の人口については、残念ながらデータを見つけることができませんでしたが、翌年の四十年十月一日現在の総人口が四千七百九十六人（男二千三百九十一人・女二千四百五人）、世帯数は八百三十八戸と創刊時から見ると人口で二百九十二人、世帯数は百四十八戸それぞれ増えています。

創刊から三十二年目（三百号発行）の昭和六十二年は、人口三千九百八十四人（男千九百八十八人、女千九百九十六人）と、「広報ふだい」の発行数と反比例するかのように人口が減少していっているのが分かります。平成十六年一月発行、五百号（十五年十二月末の人口）では、昭和三十年の創刊から人口千四十九人（男二百七十七人、女二百四十三人）の23・29％の減少となっています。人口の減少に反して世帯数は60・57％と増えています。核家族化がいかに進んでいるかがお分かりになると思います。表1をご覧ください。

人口が減少の一途をたどる理由の一つに、子どもの生まれる数が、年々少なくなっているという紛れもない事実があります。

表Bをご覧ください。「広報普代」が創刊された昭和三十年には百六十六人誕生していますが、再刊されたときの三十九年には百人、三〇〇号発刊の五十四年は、六十二人平成十五年（四月～）十二月末現在が十六人と時代を反映しているとはいっても淋しい限りの出生数です。

30年創刊から49年目に見る村の人口と世帯の推移　―表１―

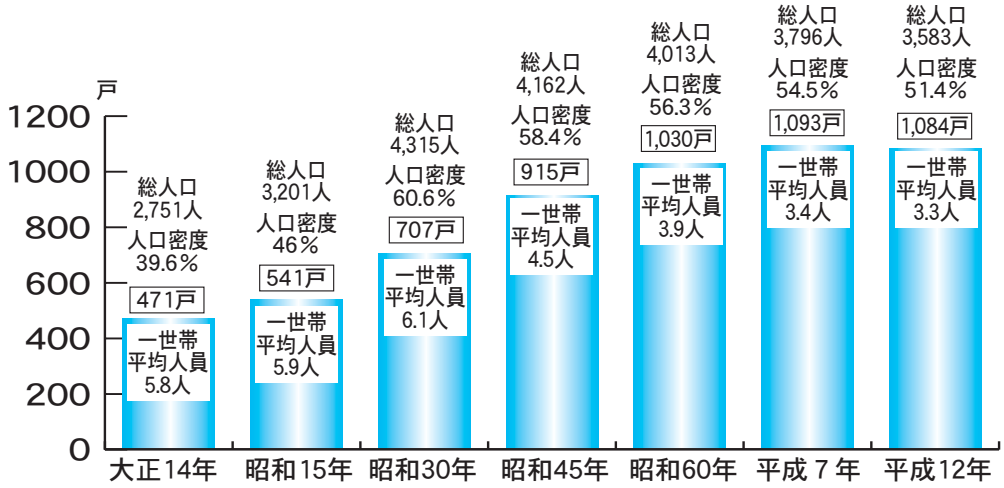


少子化に歯止めかからず

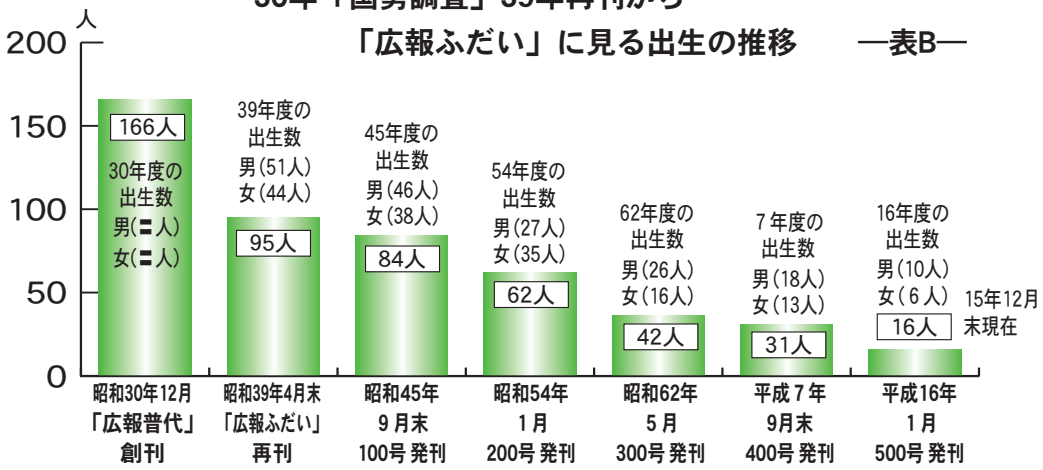
国や県では子どもを安心して生める環境をと、さまざまな対策をとってきました。村でも少子化に歯止めを掛けようと独自に、第三子が誕生すると育児祝い金として十二年度から十万円を保護者の方に支給。また子育て支援センターを設置し、一歳から三歳までの幼児を保育するなど保護者の負担を軽減しようと取り組んでいます。しかし、一向に出生率が上がる気配が見えてきません。

抜本的な解決策があるのかないのか、社会情勢は混沌と揺れ動いています。

国勢調査で見る人口と世帯の推移　―表A―



30年「国勢調査」39年再刊から「広報ふだい」に見る出生の推移　―表B―



皆さんの協力で発行し続けた42年間